

後期ハイデガーに於ける有それ自身と有るもの

清水大介

§1 有と有るもの

—序—

後期に限らず、ハイデガーの思索の基本的枠組は、一口にいうと、有 (Sein) と有るもの (Seiendes) との区別づけ——有論的差別 (ontologische Differenz) ——であるといえることができる。ハイデガーは、「有る」ということが如何なることかを、その根源の深みへとどこまでも思索した思想家である。しかもそれとともに、彼は、「有るもの」という事象が如何なることかを、どこまでも現象に忠実に追求したのである。我々はともすれば、この後者の「有るもの」の探求を、前者の「有る」ということを考えるための只の出発点と見做して軽視しがちであるが、実際には両者は深く絡み合っている。「有るもの」の規定の意味に応じて、有の規定の意味も変わってくるのであり、逆もまた然りなのである。ハイデガーの思索に於て、そしてそれからまたハイデガーのいう形而上学の場合でも、有るものと有とは、相依相属である。そこで後期ハイデガーは、両者を同一現象に於て、即ち二重襞 (Zweifalt) からその覆蔵された一重襞 (Einfalt) へと、思索することにもなるのであるが、そういう見方の萌芽は、既に前期で出来ているといえる⁽¹⁾。

とはいえ、両者は、その対極性に於て夫れ夫れ独自の規定を持っているともいえる。有の問は、この対極性に於て、「有る」ということを、向かわれるべき只一つの星⁽³⁾として執拗にどこまでも根源の深みへと追求したのであるが、そういう「有る」ということに純粹に焦点の絞られたハイデガーの眼射しは、有を、もはや有るものとの直接的な一緒性に於て捉えているというよりはむしろ、有るものに於て働いている「有る」ということを、そのどこまでも遠い遠さへと、それ自体として考察することに向けられているのである。その時、有は何か遠い神秘の相貌を帯びて来るとも言う。しかし、その遠い神秘は、実際には有るものの上に現に如実に働いているのである。(しかし、その場合、如実に働く「有る」ということが、あくまで遠さである、換言すれば「覆蔵」(Verborgenheit) であるということに、注意しておかなければならない)

このように、ハイデガーの思索には、丁度一枚の扉の裏表のように、二つの局面が存する。表は、有るものとの相依相属に於て見られた有であり、裏は、それ自体として考察された有である。我々は、この二つの局面を、彼の同一箇所の改作によって生じた次の二つの命題に認めることができる。

「有の真性には、有は決して有るものなしに現じないし、有るものは有なしには決して

有ることがない、ということが属している⁽⁴⁾（『形而上学とは何か』後語、第5版）

「有の真性には、有はなるほど有るものなしでも現ずるかもしれないが、有るものは有なしには決して有ることがない、ということが属している」（同上第4版）

第5版以降の改作された記述が、有と有るものとの相依相属を述べているのに対し、第4版の初めの記述は、有が有るものなしに現ずるという有の無依存性を述べている。この後者の記述は、被改訂の故に没却され能わざる重要性を持っているのであり、むしろこの重要性のために、ハイデガーは誤解を恐れて、表現の水準を低下させたと考えられるのである⁽⁶⁾。

それでは、この二つの局面は、一体如何にして統一された全体構造として理解されればよいのであろうか。有それ自身は有るものなしでも現ずるとともに、有るものなしでは現じない。この有それ自身の二面的性格は、有るものの優位（Vorrang des Seienden⁽⁷⁾）の許では、隠される。それは、有るものが、有それ自身の方から——物（Ding）として——見られているのではなく、他の有るものから区別される有るものの性質・限定の方から、見られているからである。有の有るものとの相依相属と無依存性とが如何に関わるかは、有と有るものとの区別の問題を前提する。そこで、我々は、有に於ける構造的差別を明らかにするために、有と有るものが夫れ夫れどういう規定性を持っているかを、問題にしおかなければならない。また、逆も然りである。

以上のように、小論の意図は、ハイデガーの有それ自身に於ける差別の構造を明らかにし、それによって翻って、有るものの真の規定を求めようとするものである。

§2 形而上学の有とハイデガーの有

ハイデガーの有の思索は、西洋形而上学との対決の中で遂行されている。そこで我々は、以下に於て、ハイデガーの有と有るものとを、形而上学の有と有るものとに幾つかの諸点で対比させて、簡潔に明らかにしておこうと思う。

(1) 形而上学が有るものの方から有るものへ向かって有を思惟するのに対し、ハイデガーはそれ自身の方から有を思惟する。

(2) 形而上学は有の脱去（Entzug des Seins）——無（Nichts）——に命運的に気がつかないが、ハイデガーはそうではない。（有の忘却の根本経験、転回）

(3) 形而上学が主観性の方から有と有るものを思惟するのに対し、ハイデガーは、開け（Lichtung）への脱自——Ek-sistenz——に於て思惟する。

(4) 形而上学の確実性が、主観性のための確知性（Gewißheit⁽⁹⁾）であるのに対し、ハイデガーのそれは、開けと現前（Anwesen）とからの「信頼性」（Verlässlichkeit⁽¹⁰⁾）である。

(5) 形而上学の思惟する根源の働きは、惹起（Wirken）——actualitasとcausalitas、さらにWille——であるが、ハイデガーのそれは、「するがままにさせる」ラッセン（Lassen）である。前者は有るもの相互の働き及び主観の働きから考えられているが、後者は有それ自身の働きとして考えられている。

(6) 形而上学の有が、主観性と連関した惹起による存立性（Beständigkeit⁽¹²⁾）であるのに対し、ハイデガーは、そういう有だけでは、本来の有は無になると考える。しかし、そ

ういう無（⁰³真有のヴェール）の働きが、ラッセンである。

(7) 形而上学は、頽落（⁰⁴Verfallen）から有を思惟する。有は、有るものの形態（Gestalt）や見かけ（Aussehen）として考えられる。有は、頽落に於ける製作（Herstellen）——*ποίησις*, *creatio*——から、またさらには確知性のために、思惟されている。それに対してハイデガーは、有の脱去の深淵（Abgrund）から、有を思惟する。

(8) 形而上学が、頽落に於て確知性のために、有るものを形態・見かけ・限定（性質）の方から考え、従って製作物（Herstand）、対象（Gegenstand）、用象（Bestand）として考え、物の根源全現象から考えないのに対し、ハイデガーは、主観を脱自した深淵の底から、世界との相即に於ける物の全現象として、有るものを考える。

(9) 形而上学に於ける有るものの優位とは、形態の優位のことである。そこでは、有るものは、他の有るものとの区別に於て考えられている——有るもの的差別（*ontische Differenz*）——。それによって、有は有るもの的に思惟される。凡ては有るものになるとは、有るもの的差別から、即ち形態等から見られていることである。それに対して、ハイデガーは、有を有るものとの区別づけに於て思惟する——有論的差別——。有の優位が明白かつ端的にいわれるのは、問題の第4版の命題に於てである。

(10) 形而上学が、頽落的な製作に於て、有るものの優位から、即ち形態等の優位から、エセンチアを成立せしめ、それによって、*ἄ-κρυβεια*（*Un-verborgenheit*）からの有るということ、単なる存在の事実（*Ek-sis-ten-tia*）に閉じこめ、そこから惹起性（*Wirklichkeit*）も成立して来るのに対し、ハイデガーは、この有るという事実を、無という現象的否定性の只中で、その内容充実へと問うていく。

(11) 両者の最根本的な相異は、恐らく有限性（*Endlichkeit*）の解釈の違いに帰着すると思われる。形而上学が、有を、頽落に於て主観の確実性のために有るものの限定・性質・形態として、及びそういう限定相互の働きとしての惹起として考えるとき、そしてまた惹起から存立性がさらに確保される時（存立性のさらなる確保への意欲）、そこには特別に解釈された有限性が前提されている。この有限性を前提として、製作ということも行なわれるのである。それに対してハイデガーは、ラッセンの開けの内に主観を超克して脱自するが、この開けは、存立性とそれへの意欲とが支配力を失った無の開けである。しかし、この無には、有の脱去覆蔽という命運的な否定性がつきまとう。そこでは別「種」のさらに根源的な有限性が前提⁰⁵されている。

§3 ハイデガーの有それ自身についての補充的説明

(1) 無。ハイデガーのいう形而上学は、存立性以外の有を無と見做し、無にならないように存立へとますます努力するところに、本質的な性格を持つ。主観的な働きと軌を一にして成立して来る存立性に立脚する形而上学に於ては、有と無とは相容れぬものとして対立する。これに対してハイデガーは、この無、即ち覆蔽された覆蔽の内に、有それ自身を認めるのである。言い方を換えれば、そのことは、覆蔽ということが根本的に有それ自身に属しているということが気づかれたということである。エセンチアの要求する*Ek-sis-ten-tia*を、ハイデガーの有それ自身は突破する。形而上学の意志は、ゲラッセン

(gelassen)せられなければならない。そういう無的な場所は、もはや存立的なものが威力を失った自由無礙な空寂の場所である。但し、そこは何も無いという意味での虚無ではないのであり、そこではいわば無的なもつと開かれた働きが、ラッセンとして働いているのである。

(2) ラッセン (Lassen)¹⁶。ラッセンとは、Anwesen—lassen (現前せしめること)のlassenが独立していわれて来たのであり、惹起とは異なった仕方での「するがままにさせる」という現前に対しての最も強い純粋な使役を意味している。その働きは、>Es gibt Sein.<<(それは有を与える)と>>Es gibt Zeit.<<(それは時を与える)とに於けるGeben (与える)というともされ、これに準じて>>Es läßt Sein.<<(それは有をするがままにさせる)ともいわれる。Es gibtとは、最も深い意味での「有る」ということを示している。ラッセンは、「それ」(Es)が現前を「与える」働きなのである。

そういうラッセンの認容的働きは、もはや有るものから有るものへの惹起 (agere, wirken, erwirken)とは見做し難い、固定的存立性の方から見れば無的な働きであり、有るもの的な因果性や根拠づけの枠内に取りえない働きと考えられる。かくなるラッセンの働きは、有るものに対しては不即不離の関係にあるといえるであろう。有るものは、このラッセンによる現前なしには有りえない。

しかし、この現前のラッセンが、同時に、現前を放ち (entlassen)¹⁷見捨てる (delaisser)¹⁸という仕方での「するがままにさせる」ラッセンであることに注意する必要がある。ラッセンは、脱去という否定性がつきまとうが故に、無的な働きなのである。「それが与える」は、有の命運 (Geschick des Seins)に於て、それ自身にとどまる (ερωχί), 脱去するという性格を持つ。ラッセンの語は、この二つの趨勢を一語で謂っているのである。後に述べるように、ラッセンは、覆蔽と露現 (Entbergen) との一如になつた働きである。

(3) 開け (Lichtung)¹⁹。そういうラッセンの働きから、先空間的な場所性 (vor-räumliche Ortschaft)としての時—空 (Zeit—Raum)が開かれる。働きが、そのまま場所になっている。ラッセンと開けとは、「それ」(Es)を別にすれば、同じ根源の脱底的な (ab—gründig) 地盤である。それは、二重襲からの有と有るものとの区別に於ける区別それ自身である。

(4) 遊戯 (Spiel)²⁰。また、そういう「するがままにさせる」ラッセンの働き (有るもの的な区別と存立性とに捉われざる、有るものの方から見て無的な働き)は、遊ぶから遊ぶだけの理由なき (ohne Grund) 遊戯であるといつてよい。但し、それは、命運的歴史的な遊戯であることに、注意せられなければならない。同じ遊戯といつても、ニーチェのそれは、ハイデガーは、存立性の意志——即ち、力への意志と永遠回帰——である²¹と見做す。人間は、死を能くする者 (die Sterblichen) ——前期のFreiheit zum Tode——として、主観性を超克して、脱自的に究極的なラッセンの遊戯にゲラッセンされなければならない。しかし、このゲラッセンハイト (Gelassenheit)²²は、有るもの的な惹起によるのではないから、「より高い行為」として、自発性の真正の本質である。そういう意味で、世界——時—空、または時—遊—空 (Zeit—Spiel—Raum)²³——は、死を能くする者の参与

を俟って初めて映一遊 (Spiegel-Spiel)²⁹ し、世開する (welten) といえるのであり、本当の物は、そこから同時に生じているのである。

かくなる遊戯は、また戦い (εργς) である。この戦いに脱自していることは、脱底的な深淵に飛び込んで (Sprung in den Abgrund)²⁹、そこを生死の地盤 (Boden, auf dem wir leben und sterben)²⁷ としていることであり、遊戯の賭にかけられて (auf dem Spiel gesetzt)、犠牲 (Opfer) になることなのである。

(5) 思索の途中性と覆蔽。ハイデガーの思索の道それ自身が、この覆蔽をめぐる戦いの内にある。有それ自身の第一の規定は、無といわれる覆蔽である。それは、本来の性起 (Ereignis) につながるものとして構想されたと思われる「世界と物」に於てもなくなるわけではなく、むしろそれがあから、「世界と物」は成り立っているのである。ハイデガーの思索は、開けの、遠さ (覆蔽) の近く (Ferne und Nähe)²⁹ にとどまりながら、エスカトンを持つ耐え抜きであり、それへの予視 (vorblicken) にすぎない。ハイデガーの思索は、途中的であることを基本的性格とする。そして、この途中性に於て、覆蔽はあくまで残り、根源の働きは、常に後述するような覆蔽と露現の一如性として示されて来る。そういう途中性と覆蔽とは、思索する者の能力の欠如に基づくのではなく、全く有それ自身 (命運) に属する事柄なのである。

有る (現前) ということに根本的に覆蔽が属していること (覆蔽と露現) と、思索の途中性としての遠さの近くにとどまるということ (有と思惟との共属)³¹ とは、同じ一つの事柄である。

§4 有それ自身に於ける差別

問題となるのは、「覆蔽と露現」の「と」の一如性である。あるいは大雑把にいて、「無と有」のものは有でも無でもない「と」といってもよい。この「と」は、下位の水準に於て、「時と有」、「世界と物」、「非現前と現前」の「と」に示されら「と」であり、さらに下位の水準に於て、「有と有るもの」の「と」にも通じる「と」である。

M・ミュラーの伝える術語で表現するなら、そこから形而上学の有るもの性 (Seiendheit) ——エセンチアとエクシステンチア——がいわれて来るところの二重襲の「有と有るもの」の「と」で問題になっているのは、「超越論的差別」 (transzendente Differenz) の差別それ自身であり、「時と有」 (あるいは、以下に示すように、「世界と物」、「非現前と現前」) の「と」で問題になっているのは、「超越付帯的差別」 (transzendenzhafte Differenz) の差別それ自身である。後者の「と」は、ラッセンとして「それ」 (Es) を指し示している。「覆蔽と露現」は、この「それ」の、それ自身を脱去せしめつつ、時と有を与える二つの根本趨勢を意味しており、その核心である「と」にこそ、「それ」の「それ」たる所以が言い込められているのである。この「それ」は、恐らく「最後の神」 (der letzte Gott) である。超越付帯的差別の差別それ自身は、「超越的差別」 (transzendente Differenz) の神であると思われる。それに対して、超越論的差別の差別それ自身は、時乃至世界としての開けであり、この開けの内に開けを与える「それ」も含意されているのである。

ハイデガーのいう「有それ自身」(Sein selbst)は、多義的である。それは、真有(Seyn)とも有(Sein)とも換言される。それらは、ほぼ時・世界・開けに於けるLassenの働きを意味していると考えるのが、妥当的であろう。しかしまた、現前を指すととれる場合もあるし、何よりも「それ」(Es)のことを謂っているとされる場合もある⁶⁸。広義の有それ自身は、これら三水準への方向性を意味しているのである。

そういう有それ自身は、前期ハイデガーの超越論的立場では、「我々の前一立(Vorstellen)に向けられた側面⁶⁹」としてしか示されて来なかった。「時と有」の問題性には、それ自身の方から示されて来るということが、必要である。それによって、根本問題である「覆蔽と露現」も、初めて適切に問題となしうるのである。後期ハイデガーは、一層現象学的方法に徹するようになる。

[哲学 博士課程三回生]

§5 差別についての補充的説明

(1) φύσις κρύπτεσθαι φιλεῖ⁶⁹。ハイデガーは、覆蔽と露現との関わりを、ヘラクレイトスの言葉「φύσις κρύπτεσθαι φιλεῖ」(Fr.123)に託して思索する。その言葉は、φύσις——開現(Aufgehen)——とκρύπτεσθαι——覆蔽(Sichverbergen)——とが、φιλεῖν即ち親密さ(Innigkeit)に於て、一如であることを謂っているのである。このφύσιςとκρύπτεσθαιとの親密さは、ἀρμονία(調和)であると同時に、ἔρις(戦い)である。覆蔽と露現とは、互いにせめぎ合い、そのことによって逆向きの調和が成り立っており、そのようなものとして、この戦いによる調和は、遊戯なのである。しかも、この遊戯は、命運的なラッセンの遊戯である。かくなるφιλεῖνは、「覆蔽と露現」の「と」にあたると、我々は解釈する。

(2) 世界と物とのアウストラク(Austrag)⁶⁹。覆蔽と露現との親密な戦いに於て、世界と物がアウストラクされる。

アウストラクの語は、「差別」(Differenz)のギリシア語動詞形 διαφέρεινから考えられている。それ故、アウストラクは、区別される両者を担いつつ繋ぎ合わせ、それによって初めて区別しようような区別(auseinander-zueinander tragen)を意味し、区別の成り立つ根源を指示している。痛苦(Schmerz)・懐胎(austragen)・λόγος等の意味が、そこに關係して来る。そういうアウストラクから、世界と物は性起せしめられる。

アウストラクは、第一に、世界と物のアウストラクである(『言葉』)。しかし、それは第二に、有と有るものとのアウストラクでもある(『形而上学の有一神論的体制』)。しかし、有が世界に、有るものが物に当たっているわけではない。むしろ、「物の物になること(das Dingen des Dinges)から、初めて現前するものの現前も性起し規定される⁶⁸」有と有るものとのアウストラクの帰着する二重襲(現前するものの現前)は、世界と物のアウストラクの一重襲(Einfalt)に於て、物の側が、世界が覆蔽されることによって、形而上学の方へ展開し始めたものである。現前するものの現前の「の」は、世界乃至開けとそこに於ける働きを意味している。この意味で、二重襲(パルメダスの éón)は、形而上学とハイデガーとの分岐点であるといえる。

(3) 時と有。かくなる「世界と物」は、「時と有」にはば対応する。既に述べたように、

有（現前）は物に対応する。時は、時一空乃至時一遊一空として、世界に対応する。「世界と物」の「と」としてのアウストラークは、「時と有」の「と」としての性起（Ereignis³⁹）にあたる。

(4) 非現前と現前（Abwesen und Anwesen）。さらに、時は、現在（現前）のみならず、既有と将来という二つの非現前によって構成されるのであるから、「時と有」が、「非現前と現前」にほぼ対応している、ともいいうる。現前は、到来（Herkunft）と去り行き（Weggang）との二重の非現前の接合（die Fuge）に於ける暫時の留まり（Weile）であり、現前するものは、自らの現前に固執する（beharren）ことなく、そこを去来していかなければならぬ。そのことは、物が露現と覆蔽との戦いの調和の内に存していることを示唆する。この非現前と現前との接合が、斉合性（der Fug）として、アナクシマンドロスの $\delta\acute{\iota}\kappa\eta$ ⁴⁰である、とされる。「非現前と現前」の「と」としての $\delta\acute{\iota}\kappa\eta$ は、「時と有」の「と」にあたると思われる。

二重の非現前は、拒絶（Verweigerung）と留保（Vorenthalt）として、覆蔽にかかわるが、この関係の究明は、今はなされない。

以上のように、「世界と物」、「時と有」、「非現前と現前」の三つの「と」の構造は、有それ自身に於けるほぼ同じ水準の差別の構造を思索している、といえる。

(5) $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ ⁴¹。かくの如き「と」は、さらにヘラクレイトスの $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ である、とされていると思われる。 $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ の根本義は、集めること（die Lese）である。集めるのは、保存し（verwahren）、守る（wahren）ためである。この集め守ることから、現前するものは現前する。（そこから、 $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ は、語るという意味にもなるのである）物は、 $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ によって守り（Wahrnis）を得る。 $\varphi\iota\lambda\acute{\iota}\alpha$ （親密さ）は、そういう恵みかなえ（Gönnen）の働きである。 $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ は、非現前と現前とのアウストラークである。ラッセンは、 $\lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ 的働きを持つ。

$\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ の根本的働きは、物が物になる（Ding dingt.）ことと、世界が世開する（Welt weltet）こととの双方に示される。 $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$ の守る働きは、一方で物が世界＝方域（Geviert）を集撰する（versammeln=dingen）こととして、他方で世界が世開して物を恵みかなえることとして、アウストラークに於て示されている。ハイデガーのいう物を真に理解するためには、この「世界と物」の一重襲（Einfalt）を見てとらねばならない。

(6) 形而上学的な有なるものの規定。露現と覆蔽との親密な戦いは、裂け目（Riß⁴⁴）であり、この痛苦に満ちた裂け目に於て、物は物になる。「作品（Werk）とは、かの戦いを戦うことである⁴⁵」といわれるのは、この意味に於てである。それとともに、世界も、物と同様に、裂け目＝アウストラークに於て、性起せしめられたものとして、世開する。 $\Lambda\lambda\acute{\eta}\theta\epsilon\iota\alpha$ のハイフンの繋ぎ目に於て、世界と物とは現ずる。

この裂け目に於て、形態（Gestalt, $\mu\omicron\rho\varphi\eta$ ⁴⁶）が成立する。この形態こそ、形而上学的な有なるものの規定といわれるべきものであり、それによって、有るものの優位が成立する。形而上学が、頹落に於ける製作という観点から有るものの有を思惟するとき、この物の第二次的規定から、従って有るもの差別（有るもの相互の形態による区別）から思惟しているのである。そこでは、跳び込まれるべき深淵（無）は、忘却されたままである。

§6 結語

有が有るものなしには現じないのは、「それ」が物を必要 (Brauch) としているからである。その構造を、ハイデガーは、有論的差別に於て思索し、それを我々は今、不十分な⁴⁷⁾がら検討した。

しかし、有るものなしでも、有が現ずる場合がある。それは、或る意味で「世界と物」に於てラッセンとして、さらには「それ」として、示されているが、しかし、命運的に「それ自体で」生起するためには、エスカトンを待たなければならぬことなのかもしれない。「この⁴⁸⁾真有としての真有は、差別以前には性起であり、それ故に有るものなしである」
(哲学 学振研究員)

— 註 —

- (1) 一応、ハイデガーの思索の歩みを、1936年を境に、前期と後期に分けておく。vgl. K. S. XIII. Anm. 4, ZSD. S. 46, Wm. S. 313. Rbm. a, S. 316. Rbm. a, VS. S. 104, etc...1936年を前後する時期は、移行期(中期)である。中期という時期を特に固有に設定することが、根本的でありうるかどうかは、今は留保する。その他の時期区分としては、初期が明らかに認められる。また、晩期を設定することができるかもしれない。前期及び前期から後期への転回 (Kehre) については、昭和54年度修論「ハイデガーの有論的差別について」で取扱った。後期ハイデガーの断篇的著作群から、思索の基本構造を別決しようとする事は、勞多き苦難の道なのであって、小論は、ようやくその端緒に着いたにすぎぬ。極度に圧縮された記述は、一つの途上の仮説を呈示することだけを目的とせざるをえなかった。
- (2) 前掲拙論参照。(3) AED. S. 7. (4) Wm. S. 306. (5) Wm. S. 306. Anm.
- (6) この箇所については、レヴィットとM・ミュラーとの古い論争があったが、明らかに後者に分がある。
- (7) N II. SS. 411, 421, 458, 486.
- (8) もっとも、ここでいう形而上学とは、ハイデガーのいう意味での形而上学である。「実際の」形而上学の研究が、ハイデガーの形而上学論の研究とともに不可欠であるが、今後の課題とする。それは、果たしてハイデガーのいう通りのものであろうか。
- (9) N II. S. 422. (10) UK. S. 30f. (11) N II. SS. 414, 446.
- (12) beständig は、N IIに限っても、次の箇所に見出される。SS. 106, 164, 190, 217, 223, 230, 270, 290, 287, 389, 403, 409, 414, 432, 433, 443, 445, 453, 462, 470.
- (13) Wm. S. 312, N II. SS. 42, 353.
- (14) Wm. S. 332, N II. S. 378, VS. SS. 12, 100.
- (15) この二つの有限性の問題については、博士課程1年次の研究報告論文で取扱った。
- (16) ZSD. S. 40, Gel. S. 35, UK. S. 97, V S. SS. 101-103. H(V). S. 279.
- (17) VS. S. 103.
- (18) Heidegger, Questions IV, p. 300.
- (19) ZSD. SS. 15f, 71-80, Ez HD. SS. 56-59, UK. SS. 56-60, 97, VuA. S. 258.
- (20) SVG. S. 188, IuD. S. 58, AED. S. 17, H(V). SS. 13, 16, 24f, 138f, SuZ(G). S. 9. Rbm. c, UzS. SS. 153, 214, 235, WhD. SS. 84, 87, NI. S. 333f, N II. SS. 380-382, VuA. SS. 178, 251.
- (21) N II. SS. 380-382. (22) SuZ. S. 266. (23) Gel. S. 35. (24) SvG. SS. 109, 129f, 143, 146, 158, UzS. SS. 214f. 258. (25) VuA. S. 178.
- (26) WhD. S. 16f, IuD. SS. 20, 28, SvG. S. 185. (27) WhD. S. 16f.

- (28) Gel. SS. 44f, 68, VuA. S. 108, Wm. S. 175, UzS. S. 21, etc... (29) Hw. S. 327. (30) ZSD. S. 57.
 (31) IuD. S. 14ff.
 (32) M. Müller : Existenzphilosophie im geistigen Leben der Gegenwart, 3. Auflage, 1964, S. 66f.
 (33) O. Pöggeler : Der Denkweg Martin Heideggers, 1963, S. 264.
 (34) Wm. S. 334, ZSD. S. 46.
 (35) Gel. S. 50.
 (36) H(V). SS. 110-112, 121-140, VuA. S. 270f, SvG. SS. 113, 122, Wm. S. 300.
 (37) UzS. SS. 25-28, IuD. SS. 57-65, N II. S. 209, VuA. SS. 193, 221, H(V). SS. 319, 343.
 (38) VuA. S. 176. (39) ZSD. S. 20.
 (40) Hw. S. 357.
 (41) VuA. SS. 209-212, 221, H(V). SS. 178, 259, 265, 277f, 292, 315, 325, 371, 378, etc...
 (42) H(V). SS. 128, 133. (43) VuA. S. 221.
 (44) UK. S. 71, UzS. S. 27. (45) UK. S. 60. (46) UK. S. 97, Wm. SS. 273-276, GP. S. 149f.
 (47) この問題のためには、あらためて彼の真性論とヘルダーリン論を研究する必要があり、また、未
 公刊の著作の発刊が、待たられねばならない。
 (48) Wm. S. 306. Rbm. g.

テキスト略語表

SuZ	Sein und Zeit
SuZ(G)	Sein und Zeit, Gesamtausgabe Bd. 2
GP	Grundprobleme der Phänomenologie, Gesamtausgabe Bd. 24
K	Kant und das Problem der Metaphysik, 4. Aufl.
Wm	Wegmarken, Gesamtausgabe Bd. 9
Hw	Holzwege, Gesamtausgabe Bd. 5
UK	Der Ursprung des Kunstwerkes, Reclam-Ausgabe
NI, NII	Nietzsche Bd. 1, Bd. 2
EzHD	Erläuterungen zu Hölderlins Dichtung, 4. Aufl.
H(V)	Heraklit, Gesamtausgabe Bd. 55
VuA	Vorträge und Aufsätze
Gel	Gelassenheit
AED	Aus der Erfahrung des Denkens
UzS	Unterwegs zur Sprache
IuD	Identität und Differenz
WhD	Was heißt Denken ?
SvG	Der Satz vom Grund
ZSD	Zur Sache des Denkens
VS	Vier Seminare
Rbm.	= Randbemerkung

Das Sein selbst und das Seiende
in Heideggers Denken
nach 1936

von Daisuke Shimizu

Die Absicht dieser kleinen Abhandlung liegt darin, die Strukturen der "Differenz" des Seins selbst ans Licht zu bringen, und dadurch auch die echte Bestimmung des Seienden in Heideggers Denken zu suchen. Dafür versuchen wir, erstens das Heideggersche Sein selbst gegen die metaphysische Seiendheit in einigen Hauptzügen abzuheben (z. B. das Nichts gegen die Beständigkeit, das Lassen gegen das Wirken, die Verlässlichkeit gegen die Gewißheit, die Ek-sistenz (den Sprung) gegen die Subjektivität (den Verfall), die ontologische Differenz gegen die ontische, usw.), und dann im herausgehobenen Sein selbst die Strukturen der "Differenz" als "Zeit und Sein" (Ereignis), "Welt und Ding" (Austrag) im Bezug auf den $\Lambda\acute{o}\gamma\omicron\varsigma$, und "Abwesen und Anwesen" ($\delta\acute{\iota}\kappa\eta$) aufzuklären, die sich auf das Problem vom Sichverbergen-Entbergen des Seins selbst konzentrieren.

Aus diesen Strukturen her kann das Seiende erst als das "Ding" ursprünglich bestimmt werden, und auch die Bestimmung des metaphysischen Seienden als Gestalt herausgebracht werden. Zwischen der Metaphysik und Heidegger steht die Zwiefalt ($\epsilon\acute{o}\nu$) als Anwesen des Anwesenden.

Das metaphysische Sein und die abendländische Geschichte dadurch ist für Heidegger nichtig. In diesem Nichts aber findet er das Sein selbst als das Lassen oder "Es gibt", worin das Ding erst west. Wir Menschen sind auch Dinge aus dem Grund des Abgrundes.

Wegen der Schwierigkeit und Weitläufigkeit der Problematik und der Unveröffentlichung der wichtigen Texte des Heideggers nach 1936 ist dieser Aufsatz noch nicht vollständig, sondern nur unterwegs. Über die sogenannte "Kehre" und sein Denken davor handelte meine Magisterarbeit in 1979.